

# 理想の身体への情熱

評論家 海野弘

## PASSION FOR THE IDEAL BODY

Hiroshi UNNO, Critic

Modern people have a strong interest in the “body” and are actively involved in enhancing physical bodies and comfort. Considering the relationship between body and mind, modern people have a strong wish to have an ideal body, and commonly embrace obsessive ideas of shaping their bodies into the generally recognized ideal style. If we can call the current various efforts of human beings to decorate their bodies, get in shape, and enhance beauty, as “body works,” the modern era can be recognized as almost reaching the full bloom of “body works.” Bodies play a significant role in displaying gender, namely, either masculinity or femininity, especially femininity. Men are required to be masculine, but not always physically. However, feminine or feminine-type bodies (appearances and looks) play an overwhelmingly important role, and women have to be greatly conscious of their bodies. Regarding the idealistic style required by society, women who cannot obtain the ideal form of body sometimes feel guilty, thinking that they are too weak to discipline themselves. Accordingly, through body works they attempt to compensate for their sense of guilt and get through the identity crisis. Thus, body works have developed into a huge industry for women, and women’s bodies now support a consumer culture, a consumer culture that is recapturing and exploiting women by a “corset” of the ideal body. Bodies that should be reformed or improved comprise a dominant market of consumer culture. The foundation of the modern “body work” industry is based on those women’s wishes for so-called ideal bodies.

### ボディ・スキャンダル

現代人は〈身体〉にかなり大きな関心を払い、そのためにかなりの資金と時間を費やすことを惜しまない。身体にいいこと、身体に気持ちいいことに積極的なのだ。そのために〈身体〉をめぐるさまざまなイベントや事件がマスコミをにぎわしている。

例えば、「ビリーズ・ブート・キャンプ」から岩盤浴に至るボディ・ワークの流行があった。そして渋谷のスパの爆発があり、ボディ・ワーク産業のあやうさが暴露された。

しかし、私がこのところ最も〈身体〉を感じさせられたのは朝青龍事件である。身体の故障を理由に巡業を休んだ横綱は、モンゴルで元気にサッカーをやっていた。それで出場停止の処分を受けた。私がおどろいたのはその後だ。横綱は一気に落込み、うつ病寸前のストレス障害になったという。私がおどろいたのは、鬼神のごとき身体に、あまりにも弱々しい心が宿っているというアンバランスさについてであった。

身体について考えることは、身体と心の関係を考えることだ。一般的には、健全なる精神は、健全な身体に宿る、とか、身体を鍛えることは、心を鍛えることだ、と信じられてきた。そのような身心の平

衡性はいまどうなっているのだろうか。

現代の〈身体〉についてまずいえるのは、そのままにしておいてはいけない、そこに働きかけて、改良しなければならない、という共通認識があることだ。ナチュラル（自然）はいけない、ある理想的身体に向って進まなければならない。

理想の身体への願望は、人間の歴史のはじめからあったともいえるが、現代ほど過激になったことはなかった。例えば私は『ダイエットの歴史』（新曜社）を書いた時、現代においては、体重への強迫観念が、精神の病に至ることを知った。

1970年代にダイエットの新しい段階が始まる。それまで体重の問題だったのに、突然、精神の問題になるのだ。ダイエットを含むボディ・ワークの目的は、健康と美である。この二つは、一致しているはずであったが、70年代から分裂し、両極的になる。そして美が先行し、美のためには健康を犠牲にするダイエットが増えてくる。例えば脂肪吸引や切除、ドラッグの使用などである。

このように、ダイエットにおいては、1970年代が大きな転換期になる。しかしボディ・ワークは、ダイエットだけでなく、多様な領域をもっていて、それぞれの転換期をもち、それらの重層のうちに現代の身体文化をつくっている。例えば〈化粧〉は1920年代に最初の近代化に転換している。

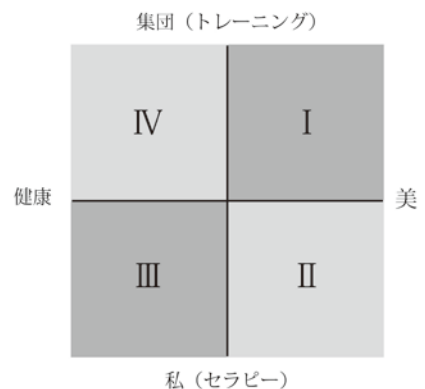
最近調べていて気付いたのであるが、ジュエリーが現代のように、肌じかに着けられるようになったのは18世紀以後である。そして女性が主に着けるものとなり、儀式用ではなく、私的な趣味によって着けるものとなり、パーソナリティの表現となってくるのは19世紀末になってからなのだ。宝石は古くから身体を飾ってきたわけだが、パーソナリティと結びつき、〈私のジュエリー〉になったのは近代においてなのである。

さて、身体を飾り、身体を鍛え、身体を美しくするための人間のさまざまな努力を、〈ボディ・ワーク〉としてくくってみよう。そこには多様なワークが含まれているので、整理するための座標を用意してみたい。健康と美を両極とする横軸に、集団と私を両極とする縦軸を直交させる。集団はトレーニング系、私はセラピー系である。

これで、4つの象限に分割できる。例えばビリーズ・ブート・キャンプは、集団（トレーニング）の上半分に入り、シェープアップされた身体をつくるのだから、右半分に入るので、Ⅰに入ることになる。

ヘア・サロン（美容院）は、〈美〉であり、〈私（セラピー）〉に属し、Ⅱに入る。健康のためのウォーキングも、個人的にやればⅢ、クラブやサークルでやればⅣに入る。

もちろんこれは、単純化した座標で、両方にまたがって、区分できないものもある。とりあえずの目安なのである。



## ボディ・ワークの過去と現在

デブラ・L・ギブリンは『ボディ・ワークアメリカ文化における美とセルフ・イメージ』（2002）で、現在のニューヨークの典型的なシーンをあげている。まず、ニューヨークのパメラズ・ヘアー・サロンが朝9時に開店する。そこから数町離れて、ジョン・ノリス博士のクリニックがある。博士は脂肪吸出しの準備をしている。そのクリニックのまわりにはたくさんのエアロビクス・スタジオがあり、多くの女性がつめかけて鏡張りのフロアで汗を流している。そして夕方になると、NAAFA（肥満容認の促進のための国民協会）のサマー・フェスタが開かれ、百人余の正装した肥った女性が、彼女たちを女性美の理想と考える男たちとパーティを繰り広げる。

このような最近の〈フィットネス〉ブームは、ギムリンによると、1960年代からのものというが、ますます過熱してきている。そしてこのブームは、フェミニズム運動への〈バックラッシュ〉（反動）と見られている。ウーマン・リブが退潮し、女たちはまた、男たちに気に入られるスタイルを獲得するのに憂き身をやつしている、というのだ。

ギムリンはこの意見には賛成していない。これらのボディ・ワークの中で、やはり女性は自己を解放し、新しい自己をつくらうとしているのだ、と彼女は見ている。

身体はかつて民族学、文化人類学の対象であった。しかし現在は社会学の対象となり、文化のメディアとして考えられるようになった。身体という表面において、年齢、性的指向、階級、ジェンダー、民族性が示されている。その差違は、ボディ・リフォームの方法においても現れる。身体の行動によって、セルフ（自己）が社会的に形成されてゆく、とギムリンはいつている。ボディにおいてセルフと社会は出会うのだ。

かくて、ボディは、性別、男性らしさ、女性らしさを示すのに重要であるが、問題なのは、女性らしさ<sup>フェミニティ</sup>にとってより大きな意味をもつことだ。

「身体的魅力は、男性にとってより、女性にとってはもっと重要である。そのことは、女性にとって、外観、そして、心理的、身体的、財政的な、身体への投資へのこだわりを強める。女性は、男性よりはるかに、身体を改革する目的のグループに巻きこまれる。女性は男性よりはるかに、拒食症や過食症といった、身体的トラブルの犠牲になりやすい。実際、アメリカ合衆国の最近の調査では、女性の多くは、肥ることは、死ぬより怖いといっている。」（デブラ・L・ギムリン 前掲書）

男性も男らしさを求められるが、それは必ずしも身体だけのことではない。身体だけなら朝青龍も男らしさの権化のようである。しかし、女らしさでは、身体（外観・容貌）が圧倒的に大きな役割をもってしまふ。そして、男性も女性も、女性の容貌を、性格、セルフと結びつけてしまふ。女性の身体は、男性よりもはるかに、セルフの外界への表示となっている。

見た目が9割などといわれるが、これは、男女一様ではなく、女性にとって、より比率が多いようである。

女性においては、ボディとアイデンティティはより強く結びつけられて見られる。そのために、女性は、ボディをより強く意識せざるを得ない。

1970年代ぐらいから、女性に求められる理想的体型（ファッション・モデル体型）とアメリカ女性の平均体重はますます離れていくようになった。

1954年のミス・アメリカは、5フィート8インチ、132ポンドであった。今日のミス・アメリカ・コンテストへの参加者は、5フィート8インチで、117ポンドである。27年前には、ファッション・モデルは、アメリカ女性の平均より8パーセント軽かったが、1990年には23パーセントも痩せなければならなかった。

1950年代より現在の方が、アメリカ女性は体格がよくなり、体重は増している。それにもかかわらず、理想体重は、軽くなっているのだ。したがって、ずっと多くの人たちが肥っていると見られるようになっている。つまり、理想の身体という目標はますます遠くなり、欲求不満はより募っている。

ギムリンは、身体をリフォームしようとする努力、投資は、セルフ（自己）への働きかけであると述べる。

「ボディ・ワークを行うことで、女性は、文化的な要求に応えられない身体への個人的責任を減らし、基準的なアイデンティティを切り抜ける。」（前掲書）

ちょっとわかりにくいだが、現代文化は、ほっそりした理想体型を要求するのに、それに応えられないと、自分は規律のない人間だ、と罪悪感を抱いたりする。ボディ・ワークをすることで、罪の意識を軽くし、アイデンティティの危機を切り抜ける、ということらしい。

女性は、自分の身体と理想的な女性美の乖離に悩んでいる。どうやって両極的な状況を解消して、ボディとセルフを統一した私を構築することができるのか。ボディ・ワークはそのための方法、手段、そしてアカウンツ（理論、理由づけ、言い訳）なのだ、という。

ギムリンは、ボディ・ワークの例として、ヘア・サロン、エアロビクス・クラス、整形外科クリニック、肥った人のための社会的、政治的組織の4つをとりあげる。この4つの例は、2つに分けられる。1つは、ヘア・サロンと整形外科クリニックで、美容師とお客、医師と患者という、1対1の関係が基本となっている。私が示した図で、〈私〉の例に入ってくる。これに対して、エアロビクスとNAAFAは、集団の例に入る。

この2つの分類のうち、前者は、1対1であり、1人の指導者の意見に左右されるから、特に、ある美的イデオロギーに強く支配されやすい。カリスマ美容師が現れるのはそのためである。

もう一方の分類では、オープン・スペースで、みんなと一緒に行動するから、まわりの仲間の動きに左右され、群集心理に支配される。

2つのグループのうち、より個人的で、積極的な美的イデオロギーをつくるのは密室的な前者である。集団的で、オープンである後者は、受身であり、セルフやボディについて積極的な考えはなかなかつく

れない。

また、前者のグループは、より商業的で、高利益を生み出す。後者では、商業から同好会までいろいろある。エアロビクスでも、ビリーズ・ブート・キャンプのような商業化されたものから、サークルや公共のエアロビ教室などまでがある。

一般的に言えば、前者のボディ・ワークの方がずっと高価であり、贅沢であり、それだけ、ラグジュアリーなボディが期待されることになる。私がつくってみた図で言えば、縦座標の〈私〉の極に近づくほど、そして横座標の〈美〉の極に近づくほど、身体的理想型に達するのが困難になり、そのための努力、投資は大きくなり、ラグジュアリーになる。

現代において、ボディ・ワークは、女性を市場とした巨大な産業となった。身体、特に女性の身体は、消費文化を支えるものとなった。消費文化は、理想型というコルセットによって女性を再び捕え、搾取しようとしているのだろうか。

デブラ・ギムリンは、ボディ・ワークをフェミニズムの〈バックラッシュ〉とする見方には賛成していない。女性はボディ・ワークに受動的に従って、理想型という、目の前にぶらさげられた人参を追いかけているのではなく、ボディ・ワークの中で、セルフとボディの結び目を探り、〈私〉を、社会的な〈私〉を構成しようとしているのだ。私の身体はつくられるものではなく、私がつくっていくものなのだ。

ギムリンは、現代女性に求められる美の理想型が一方的に身体に押しつけられたものではないことを具体的に明らかにしていく。女性はボディ・ワークに参加するが、美のイデオロギーに抵抗し、自らの身体を見出そうとするのだ。

## 日本のボディ・ワーク

ボディ・ワーク文化はアメリカで発達した。ビリーズ・ブート・キャンプからパリス・ヒルトン現象まで、アメリカ産である。そして、日本は、その最も熱心な輸入国である。21世紀のグローバリズムは、アメリカのボディ・ワークを同時的に日本にもたらす。では、アメリカの〈身体〉と日本の〈身体〉はついに同じになったのだろうか。

ローラ・ミラーの『ビューティ・アップ——現代日本のボディ・エステティックス研究』（2006）は、実に面白い、日米の身体比較文化論である。そこで明らかにされているのは、グローバリゼーションで世界が均一化し、日本のティーンエイジャーが金髪で白い肌のパリス・ヒルトンのコピーになるといった表層的な分析の下に、日本的な美のイデオロギーが潜んでいることである。

例えば〈白い肌〉がもてはやされ、日本の化粧品会社は、肌を白く明るくするコスメティックを宣伝しているが、それは必ずしも欧米の白人主義のコピーではない。日本の美容産業は、欧米の傾向を取り入れつつ、その〈白さ〉を、日本の伝統的なコンテクストの中でとらえ直して宣伝している。ローラ・ミラーは、それを、異文化の混合によって形成される第三の独自の文化として、「クレオール化」と呼んでいる。

日本には神仏混淆といった伝統があり、クレオール化がきわめて得意であったと見られる。ミラーは、日本のボディ・ワーク文化をクレオール化としてとらえるとともに、それによって、現代の〈身体〉への関心、投資、ラグジュアリー化にさまざまなヒントを与えてくれる。

クレオール化の典型は日本の結婚式である。ウェディング・ケーキや、にせのチャペルは西欧風の発明であり、神道による神前婚も、日本古来のものではなく、明治の発明だ。日本の化粧品会社は、フランスまがいの名をつけたスキンケア用品をつくっている。

新しい美容法は、欧米風か、日本の伝統風かに命名されて売り出される。例えば、エステ・サロンでは「海女マッサージ」なるものが勧められる。あったかどうかは別として、日本古来のマッサージ法のように見える。新しいシャンプーも「椿」と名づけられると、江戸伝来のように見える。「アーユルベータ」とか「陰陽五行」などといった東洋医学風のトリートメントもある。

グローバリゼーションは、欧米と日本のエステを同時代的にするが、日本的であることも主張される。ミラーは、海草トリートメントをその例にあげている。伝統的な日本食である海草は、2000年まではエステ用で使われることはなかった。欧米では海草が混じった土（泥）をスパなどで身体に塗ったりしていた。1990年代に、日本でもそれをまねるようになり、2004年までに、日本の企業でも海草を成分とするスキンケア商品を売り出し、アジアの伝統的な方法であるかのように宣伝した。

「美容産業は、現代の技術的合理性に立脚するだけでなく、古代の知と<sup>ナチュラルネス</sup>自然性の用語に依存している」（前掲書）

ボディ・ワーク文化を、西欧とアジア（日本）、過去と現在の折衷というコンテクストで読んでみると、その多様性や仕掛けが面白い。そして、身体にリフォームとラグジュアリーを求めるこの文化は、巨大な産業となり、多くの人に関わるものとなっている。それを支える美のイデオロギーは、女性を束縛するコルセットであろうか、それとも女性の自己実現の拡張なのだろうか。

「美は社会的責任とエチケットの様相を帯びてきた。」（前掲書）とミラーはいつている。身体とリフォームは、エチケットやマナーにまで拡張され、義務づけられているわけである。

リフォームすべき、改善の余地のある身体は、消費文化の有力なマーケットとなる。そこでは、到達すべき理想型が掲げられ、そのためのさまざまなハードルが示される。それらの迷路のようなコースをゲームのように切り抜けていくのが、ボディ・ワークなのだろう。そのゲームを、わずらわしい拘束と見るか、自己を探すための障害レースとして、身体に与えられる苦しみと喜びを感じるか、については決定的なことはいえないが、身体という舞台に繰り広げられる、変化に富んだドラマに私は魅せられてしまう。

## 海野弘 (うんのひろし)

1939年、東京生まれ。早稲田大学文学部卒業。美術、都市論、小説などの分野で精力的に執筆活動を行っている。著書に『ダイエットの歴史』（新書館）、『モダン・デザイン全史』（美術出版社）、『陰謀と幻想の大アジア』（平凡社）、『私の東京風景』（右文書院）、『秘密結社の世界史』（平凡社新書）、『陰謀の世界史』『スパイの世界史』（文春文庫）、『セレブの現代史』（文春新書）、『ホモセクシャルの世界史』『二十一世紀』（文藝春秋）、など、多数。

(※肩書は掲載時のものです。)